

18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について

亀田 一邦

九州国際大学附属中高等学校

受付：平成19年10月10日／受理：平成19年12月21日

要旨：広瀬旭荘の日記を読むと、永富独嘯庵の墓は大坂のみならず、下関にも実在したことが確認される。筆者はこの展墓の記録に従って数度の探索を試みたが、見つけることはできなかった。しかし、その過程で、藤玄雄という未知の医家の古墓を発見した。墓石には300字を越える碑銘が刻され、内容は当時の下関の医学の流れを考える上でも極めて興味深いものを有している。特に以下の4点については、十分な注意が必要と思われる。

1. 藤玄雄は香月牛山の高弟であった。
2. 馬関の王子町には同門の永富友庵も開業していた。
3. 藤玄雄の次男が在京儒医として知られる藤左仲である。
4. 撰文者も同門の藤井問庵である。

この論文は新たに発見した墓碑の内容を詳細に分析することから始め、まずは玄雄がいかなる医家であったかを紹介したい。次に同時期に活躍した香月門の藤井問庵と永富友庵に言及し、その上で18世紀の下関医界の特徴や、そこに起こった変化を、彼らの事蹟や次世代の活躍を踏まえながら検討する。

キーワード：藤玄雄・左仲、香月牛山、藤井問庵、永富友庵・独嘯庵、小倉医学と長府医学

はじめに

西国経済の拠点として繁栄した近世の下関には、医史学の上から見ても多数の興味深い事象が展開している。とりわけ18世紀における永富独嘯庵(1732-1766)の登場は最大のトピックではなかったかと思う。一時期ではあったにせよ、独嘯庵が王子の医局で古方派の町医として、蘭方にも理解を示しながら実際に診療を行なったことは、当地の医家、医界に少なからぬ影響を及ぼしていた。しかも門下に亀井南冥、小石元俊という偉器が育成されたことは、後々の長府・馬関の儒学、医学の傾向、諸々の学芸の発展を考える上でも軽視できぬ出来事となってゆく。

独嘯庵には既に多くの研究があり、ことに関西では大坂蘭学史上の先駆者として評価が定着している¹⁾。それに比べて独嘯庵が医として生きたいま一方の「場」である下関の状況は、宝暦・明和

の医学、医界の様子はもとより、同時代の開業医家の氏名等をも含めて殆どが未解明のままなのである。筆者はこの点を憂慮し、平成10年頃から当地医家に関する調査に着手、今も彼らを生み育て、行動させた下関という土地の思想・文化史的 positionの確認作業を続けているが²⁾、ここに来てようやく当時の状況の一端に触れることが可能となったのである。これに関して最も多くの情報を得たのが、藤玄雄(1702-1772)の墓碑銘である。これは未発表の石刻資料であり、今後、関門地域の医史を考える上でも活用が期待される貴重な史料と判断される。

本論はこの300字を越える碑銘の内容を検討し、まずは藤玄雄がいかなる医家であったかを紹介する。その上で藤氏の周辺に位置した藤井問庵、永富友庵等、関連人物に言及し、その関係や交流を通して、18世紀の下関医界の状況を読み取っていきたいと思う。

(1) 「即山処士藤玄雄塔」の発見

筆者はかつて広瀬旭荘と長閑文人の交渉を考察したことがあるが³⁾、根本資料となる『日間瑣事備忘録』を読むと、天保9年3月18日⁴⁾と文久2年10月24日⁵⁾の両度、旭荘が馬関に存在した永富独嘯庵の墓に詣でた事実が確認される。ただし、再訪時には夥しい数の墳塋を前についに発見できなかったと記しており、実際の展墓は天保中の一度だけであった。筆者も記載された道順に沿って幾度か探墓を試みたが、やはり結果は同じであった。ところが探索の最中、棹石の三面にびっしりと刻字のある古墓の存在に気づいたのである。上下角はやや剥落しているが、刻字はさほど風化しておらず、概ね判読が可能であった。棹石と台石の材質が異なるゆえ、何らかの理由で現在位置に棹石だけが移されたようである。角碑型の棹石上部は丸兜巾状を呈する。以下この墓石の各面ごとの刻字を原文で掲げ、後に書き下し文を示す。

〔正面〕

即山処士藤玄雄塔

〔左面〕

□□玄雄諱義三大職冠藤公之苗裔也中間□藤清正之子忠広属毛利家而住赤間関改氏藤江氏之高祖也祖玄意父玄東玄雄孤而見養叔父長而学香月牛山先生遂従之洛親伊藤堀之修儒而聞道矣業成帰郷興廃斯新也玄雄詢言敏行治已広業益近其中有治奇而奇効出衆医之表別録而伝家矣施治之暇

〔裏面〕

好辞賦而屢為章矣初余亦学牛山君□□□之教導不少玄雄帰郷余亦多年而帰郷居処相隔不得数見以此矣玄雄家栄財不乏足養老延寿何料明和壬辰五月十六日七十有一忽長逝矣可惜哉可惜哉有二男伯玄隆左仲孫源玄隆哀慕益甚就余請碑銘余以旧交略序行状銘曰

〔右面〕

此是玄雄出淡海公至徳後裔汚存遺風隠医仁専国手良工翩翩如爾比相豈空可謂無辱大祖靈功家栄財足子孫不窮孝嫡哀慕追遠慎□密孤□□隆□応同千秋神明照世世中

六月下旬 藤利謹誌

〔書き下し文〕

□□玄雄、諱は義三、大職冠藤公の苗裔なり。中間は藤清正の子忠広に□するも、毛利家に属して赤間関に住み、氏を改む。藤江氏の高祖なり。祖は玄意、父は玄東なり。玄雄、孤にして叔父に養はれ、長じて香月牛山先生に学ぶ。遂に従って洛に之き、親しく伊藤堀之(川か)、儒を修めて道を聞けり。業成って帰郷し、廃を興すこと斯れ新なり。玄雄、詢言敏行、治已に広く、業近きを益す。其の中に奇を治して、奇効衆医の表に出づる有れば、別録して家に伝へたり。施治の暇には、辞賦を好んで屢々章を為す。初め余も亦牛山君に学び、□□□の教導すること少なからず。玄雄帰郷して余も亦多年にして帰郷するも、居処相隔つれば数々見ゆるを得ず、以て此に至れり。玄雄、家栄へ財乏しからず、養老延寿に足るも、何ぞ料らんや、明和壬辰五月十六日、七十有一にて忽ち長逝せり。惜しむべきかな、惜しむべきかな。二男有り、伯は玄隆、左仲、孫に源あり。玄隆、哀慕益々甚だしく、余に就きて碑銘を請ふ。余は旧交を以て略々行状を序す。銘に曰く、此は是れ玄雄、淡海公より出でたる至徳の後裔なれば、遺風を汚存せんや。医に隠れて仁をば専らにし、国手良工の翩翩たるものなり。如し爾を相に比すれば、豈に空しと謂ふべけんや。大祖の靈功を辱しむること無く、家栄へ財足り、子孫窮まらず。孝嫡の哀慕、追遠□終、密孤□□、隆□応に同じければ、千秋の神明、世々の中を照らすべし。

六月下旬 藤利謹んで誌す。

(2) 藤左仲の父藤江玄雄の事蹟

即山処士藤玄雄については、諸書に言及がなく、今回初めて世に出ることになった江戸中期の下関に活躍した町医である。後世の文献には藤江氏を見ず、当地に子孫が永続したものか不明であるが、現在は無縁墓となっている。墓碑には一族の出自、玄雄の修學歷、家族、下関での診療の様子、性向・人格、趣味、評価等が記載されている。以下、碑文の内容に従って玄雄の生涯をたどることとする。

藤玄雄の苗字は正しくは藤江氏であった。藤は

これを修したものである。諱は義三、即山と号し、医家としての通称が玄雄であった。処士とあるから官医とはならず、生涯を町人身分で通したものと思われる。元禄15年に赤間関に生まれ、明和9年、71歳で同地に没しており、まさに18世紀、江戸中期に活躍した医家であった。なお独嘯庵よりも30歳の年長である。碑は遠祖を大職冠鎌足とし、銘はその男の淡海公（不比等）の後裔とする。要するに藤江氏は藤原姓であり、町医ながら由緒正しい家柄であった点を撰者は強調するのであるが、真偽のほどは定かではない。

一族の状況がある程度判明するのは、幕藩期に入ってからである。「中間」は「なかごろ」と訓む。剥落の1字は「仕」であろうか。玄雄の数代前までは肥後加藤家の2代忠広に仕えていたというが、それが医員であったのかどうかまでの説明はない⁶⁾。清正の後嗣忠広は寛永9年（1632）に除封となり、加藤家は断絶した。一家の下関転住がこの主家改易に起因する切迫した事態であったのか、あるいはそれ以前の出来事であったのかもまた不明である。頼った毛利氏というのは萩宗藩ではなく、赤間関の大半を領した長府支藩であったと考える方が自然であろう。来関後は改氏して藤江を名乗ったとある。肥後で称した氏及び苗字を変えた理由は知られぬが、たとえ改氏が何らかの不都合を覆い隠すためであったとしても、心機一転、再起といった積極的含意までを否定すべきではない。また来関当初、士分として処遇されたとすれば、平士であったのか、それとも医官であったのかも知りたい所であるが、単に「毛利氏に属し」とあるだけでは読み取るのは困難である。それが高祖、つまり祖父の祖父の代の事であった。高祖、曾祖父の名は略してあるが、ともかくも藤江家は、遅くとも寛永の半ば頃までには長府領赤間関に移り住み、以後、祖父玄意、父玄東、玄雄と続き、馬関時代の藤江氏は玄雄で5代目となっていた⁷⁾。なお西谷寺墓地の寄墓中に祖父玄意の夫婦墓が確認できた。碑文はないものの、正面には「藤氏理庵玄意居士」「超華勝顔清□信女」の法名を刻む。建立は元禄6年（1693）4月3日とあるから、祖父は玄雄誕生前に没していたことが判る。玄字の使用や理庵の号から察するに医家で

あった可能性が高い。藤江氏が来関当初から医を業としていたかは不詳ながら、祖父の代には開業していたものと思われる。

玄雄の父母は早くに亡くなり、父玄東の弟（氏名不詳）が引き取ってこれを養育した。この叔父もやはり下関で開業する医家であったと見られ、玄雄が成長すると医家としての大成を期待し、豊前小倉に老を養っていた高名な医家香月牛山に入門させた⁸⁾。牛山はかつて中津藩医であったが、幕府の封禄半減の措置により、家臣団も人員削減を迫られ、牛山も賜暇を与えられた。これによって牛山は上京する。元禄13年の禍累である。玄雄の入門を常識的に10代後半と考えれば、時期は享保年間に入ってからのことと思われ、享保3年に牛山（61歳）が小倉藩医に招かれた一件に照らせば、玄雄は帰倉時の牛山に師事し、その学塾の医仙堂に学んだものと思われる。以後も牛山は上京することがあったが、その際に玄雄が随従していた事実が確認でき、常時百有余あったといわれる門弟中でも師の信頼が特に厚かったようである。それは享保18年に梓行された牛山の著述『習医先入』の冒頭に、筆記者の1人として藤江玄雄の名が明記されていることから判るのである。

牛山78歳のときに成った『習医先入』は、自らの経験に基づき、医学を修める順序や医家の倫理について弟子たちに説き聞かせたものである。本書自序には次のようにある。

三、四の諸生有りて、雨の霄、月の夕べ、洛水を徒渉して僑居に来往して習医の法則を問ふ。覚えず桴鼓の寅鶏に相応じて、已に報ずること亦幾回ぞ。豊の三小子側らに在り。筆記して以て秩と為す。亦医を習ひ医先づ入るの言を惟ふなり。此の言、耳に盈ち腹に充ち、以て邪説を距ぎ、疑惑を解かしめんと欲すれば名づけて『習医先入』と曰ふと云へり⁹⁾。

日付は「享保丁未歳冬至日」となっている。文中の「豊の三小子」というのは、牛山師の口述を筆記した内海春東、相良梅山、藤江玄雄の3名を指す。「豊」は彼らの生国をいうのではなく、豊前小倉の医仙堂への遊学者であることを示した表

現であろう。これにより藤江玄雄の享保12年(1727)冬の在京が確認できるのであり、晩年の牛山師のもとにあって見聞を広め、医学修業に情熱を傾けていたことが確かに立証されるのである。

在京中の玄雄の修学は医にとどまらず、医書読解に際し、必須の教養となる儒典にも及んだ。碑文にはこの点を「伊藤堀之修儒而聞道矣」とある。やや訓読するには難があるが、趣意は伊藤氏の家塾たる古義堂への入門をいうものかと思われる。「之」は「川」の誤刻であろうか。古義堂は東堀川通下立売にあり、牛山師は伊藤仁斎・東涯父子と親交があった。当時既に仁斎はこの世に亡く、東涯は還暦を迎える少し前であった。玄雄が誰に師礼をとったかは不明ながら、「堀川の五蔵」(東涯、梅宇、介亭、竹里、蘭嶋)のいずれかに入門し、そこで古義学派の視点から経書に対する理解を深めたことはほぼ疑いのない所である。

藤江玄雄は本州最西端に住まう町医に過ぎなかったが、しかし香月牛山に師事し、師に随行して上京を果たしたことで、儒医として立身する技術と知識、そして人脈を手に入れたのである。前引の『習医先入』の序文には、牛山がこの歳の春に藩公から休暇を賜り、再び洛東に戻っていたことが記されている。牛山はこの期間にも治療や講学を懇望されれば、厭うことなく喜んで対処していた。玄雄らは師の側において学問を続けると同時に、門人の中核に位置して教導を補佐し、折々は代診を勤めることもあったろうから、この在京経験が後々の流行医となるための基盤を形成したともいえる。玄雄は牛山師と堀川塾の碩儒たちから受けた学恩を最大の収穫として下関の実家に戻ったのであった。

京での修学を終えて帰郷した玄雄は、藤江家の中興を期して医業に出精した。元来、玄雄は温厚誠実で努力家であったため、地元の人々にも信頼され、治療の技術も確かであったことから、馬関の流行医として大いに繁盛するようになる。独自の薬方による治療は衆医に卓越する効験を示し、その処方方を別録して家に伝えたともあり、この点は医業関係の著作が残されていた可能性を示唆するが、今日に伝わるものはない。診療の合間には好んで詩文を作ったとも記されており、医書のみ

ならず漢学全般に対する素養も豊かであって、そこに風雅な趣味世界を好む地方の富裕な文人医家としての一面を垣間見ることができる。

玄雄は志の通りに藤江の家を再興し、明和9年5月16日、71歳で遠逝した。玄雄には2人の男子があった。長男を玄隆、次男を左仲といった。ここには見逃すことのできぬ極めて重要な情報が示されている。すなわち、藤江玄雄の次男こそ京で医を業とし、詩文書にも巧みであった藤左仲(1770-1811)なのである。この点も今日まで知られていなかった新事実である。玄雄が没したとき、左仲はわずか3歳であり、最晩年の玄雄が70前に授かった子になる。この辺りにやや複雑な家庭事情が存在するように思う。一説では左仲は独嘯庵の姉が三上次助(長府藩槍術師範)に嫁して生まれた5男であったという¹⁰⁾。これを事実とすれば、藤江家に養子に出されたか、あるいは三上家を離縁された妻が藤江家に再嫁して、まだ幼かった左仲だけを連子としたという解釈も成り立つが、真実は分からない。広瀬淡窓の『懐旧楼筆記』巻6には、「其ノ父ハ独嘯庵ノ兄ニシテ、下関ノ町家ナリ。左仲幼ニシテ僧トナリ、京師ニアリ。又還俗シテ、田原氏ノ義子トナリ、田原幹蔵ト称シ……既ニシテ田原氏ヲ出テ云々」¹¹⁾とやや詳しく見える。3歳で父を亡くしたと、幼くして寺院に入れられた境遇とは無関係とは思われない。また淡窓は左仲の父を独嘯庵の兄であると説明している。通説では三上次助が左仲の実父であり、独嘯にとっては確かに義兄に当たるが、この人物は長府藩士であって馬関の町人ではない。淡窓は「二ハ藤左仲、長門赤関ノ人。三ハ村田雄斎、長門長府ノ人ナリ」¹²⁾と、赤間関と長府を截然と区別して表記するから、三上氏を指すとは思えない。では父を藤江玄雄と見るとどうか。無論、玄雄は独嘯庵の実兄ではない。しかし独嘯庵の長姉の再嫁先であったとすれば、玄雄も義兄となり、下関の町家という点でも矛盾はなくなるのである。ただしこの推論は左仲が単身で養子に行った場合には成り立たない。あくまでも母子ともに藤江家に入らなければならぬのである。いっぽう独嘯庵を養子に迎えた永富友庵家との関係も注意される。友庵は玄雄と同じ香月門であり、しか

も狭い王子町内の同業者となれば、両家の間ではごく自然に養子の遣り取りがあったと考えるのが一般である。また女子の婚姻を通して両家が深く結びついていた可能性も否定できない。この方向からも玄雄・独嘯庵の義兄弟説は成立する。以上のように両者の関係には幾通りかの見方が可能なのであるが、現時点ではいずれも確証がなく、推測の域を出るものではない。

また孫に源があった。家を嗣いだ玄隆の事蹟は、玄雄の死を嘆き悲しみ、墓碑銘を父の旧友の藤利なる医家に依頼したという点以外は一つ分からない。源という孫はこの玄隆の嫡男であったろうか。以上、不明な点も多く見受けられたのであるが、ともかくも藤江玄雄は香月門の高弟、そしてまた馬関の文人肌の流行医として、幸福な生涯を終えたことがこの碑文の内容によって判明するのである。

(3) 撰文者「藤利」こと藤井問庵

さて本節では撰文者の「藤利」について考察を行なうものとする。当初、筆者は同業の藤江氏の一族で、かつ文辞に巧みな誰かであろうと思い込み、氏名の詳細までは判明するまいと諦めていたのであるが、調査を進めるうちに有力な候補を探り当てることができた。それが長府藩医の藤井問庵である。そのように判断する根拠は2点ある。まず第1に藤井問庵が香月牛山の門人であったことが確認できる点である。碑文には藤利自らも玄雄と同じ香月門であると明言していた。それを裏付けるのが牛山師の『葉籠本草』に附録された『万里神交』の序である。実はこの作者が藤井問庵なのである。本書は長崎に寄寓していた清人医家の趙玉峰に、牛山が『葉籠本草』の序を求めたことを契機とし、それ以後、両者の間には数次に及ぶ詩の応酬や医説に関する意見の交換が行なわれたが、それらを1冊にまとめたものが『万里神交』であった。藤井問庵がなぜ本書の序を書いたかという理由は、次の箇所を読めば直ちに諒解されよう。

往復、三、四たび、予、側に侍す。従って手書は遂に巻を為し、名づくるに万里神交を以て

し、剖劓氏に命じて梓に上す。余、惟ふに、先生の門人弟子、西京及び四方に僑居する者、幾人ならんや。今、其の輩をして謄写の勞無からしめんと欲するが故に、此の挙有るのみ云々¹³⁾。

右により藤井問庵が香月牛山の門人であったことが判明する。序文の依頼は、第1には牛山の側近にあつて、本件の経緯を熟知していた門弟であることに起因し、また藩医の身分であった点も著作の権威付けには好都合であった。さらには問庵に文章家としての評価があったことも考慮されてよいかと思う。この3点をもって藤井問庵が選ばれたのである。『万里神交』の日付、署名等は「享保己酉の歳秋八月の望、長門府の医官、問庵藤道生春林甫、筆を豊の医仙堂の塾中に揮へり¹⁴⁾」としてある。享保己酉は14年のことである。「豊の医仙堂」というのは、小倉の香月塾を指す。牛山はかつて滞京中に高倉に屋舎を建て、これを医仙堂と称したが、小倉に移っても重ねて医仙堂と命名した学塾を営み、ここを子弟教育の拠点としていた。問庵はその医仙堂でこの原稿を起草したというのである。すでにこの時、問庵が長府藩医であったことは明白であり、その身分にあつてもいまだ小倉城下にある医塾に出入していたことは、牛山師の感化、薰陶の大きさ、並びに師弟間の信頼関係の深さを十分に物語っているだろう。

『万里神交』序の記述により、長府藩医藤井問庵が香月牛山の門下であったことは明白となったが、碑文の署名は単に「藤利」とあるだけで、それが藤井問庵かどうかまでは判然としない。それがなぜ問庵と断定できるのか。この点については、宝暦13年の長府御家中分限帳に照らして確認することができるのである。すなわち切米部、中扨従60石として「藤井問庵 藤原利伯¹⁵⁾」があり、この記録によって修して「藤利」となることが導かれ、その結果、藤江玄雄の墓碑の撰者が同門の藤井問庵であったことが確定するのである。

藤井問庵は藤江玄雄とともに京で香月牛山に学んでいたが、玄雄が一足先に帰郷し、その後かなり遅れて遊学先から長府に戻ったことが碑文に見えている。長府士の馬関への随意の立入は藩法で固く禁じられていた。ために問庵は帰郷してから

もなかなか玄雄に直面する機会がなかった。そのうち病没の連絡があり、嫡嗣の玄隆から旧交の誼みをもって碑銘を書いて欲しいとの懇望を受け、この文章を撰したのであると問庵は淡々と語っている。藤井家は天保15年の分限帳には記載がないから、問庵の後にいったん跡絶えたようである。その後、藩府は絶家の名跡を儒員にあてがい、名家の再興に努めさせたが、後継の藤井長五郎は出奔、藤井璋之助は刑死するなど不祥事が相次ぎ、ついに廃絶するに至った¹⁶⁾。

(4) 永富友庵とその周囲の人々

さて先にも触れたが、独嘯庵の義父永富友庵(?-1775、古計先生¹⁷⁾)も香月門に学んだ一人であった。友庵が牛山の門弟であったことは、玄雄や問庵に比べれば、はるかによく知られたことである。この点については小田濟川「独嘯庵先生行状¹⁸⁾」が「友庵、香月牛山を師とす」と記し、また『漫遊雑記』に独嘯自身が「家君、前豊の香月牛山翁に師事して、東垣氏の方を修む」と述べることから明らかである。また後世、友庵を牛山門の逸足とする説も広く行なわれている¹⁹⁾。

永富家は藤江家と同じ王子町にあった。しかも代々医業を営んでいたことは、山県周南「永富昌安の東都に遊ばんとするを送るの叙」に「蓋し其の父家世々医たり」と見えている²⁰⁾。左仲の「再刻漫遊雑記囊語二書序」によると、永富家もまた藤原姓である。両家は古くから格別の間柄にあったことが推測されるが、永富側は友庵以前の人物や家筋に関しては全く不明である。ただ18世紀末(安永-天明期)に長富升庵という経倫の才を持つ儒医が王子の天柱山に隠棲しており、またその暮らしぶりを長富恵淑という医人が書いた「天柱居記」が伝存していたという²¹⁾。当時の慣習として長富は永富とも書いたと思われるから、多分この両者は友庵と同族にあったと見られ、実に興味深い存在ではある。ただし今日では両者の伝を含めて、もはや何の記録も残っていない点が惜しまれる。王子界限にあっては、藤江、永富の両家は、遅くとも元禄頃には当地儒医の双壁として認められていたのではないかと筆者は考えている。

ところで、18世紀後半、当地は幕末維新期の

激烈さとは異質の医学史上の変革を1人の医家によって体験させられている。すなわち友庵の養子独嘯庵による古方派医学の紹介である。これが下関における古方受容の先蹤となり、以後、当地の後世方派は次第に衰微する。従って結果的に見て、馬関では独嘯庵が旧派駆逐の尖兵に位置したのであり、医学革新の旗手の役割を果たしたと結論されよう²²⁾。

18世紀前半の豊閑医家に強い影響を与えていたのが、後世方の大家香月牛山であったことは前述した通りである。牛山の医仙堂には馬関の有力町医のうち、永富友庵、藤江玄雄の両者が学び、また官医にあっても藤井問庵が門下として活躍していた。この事実そのまま下関における後世方派の隆盛と重なる。実数を把握できる資料は残っていないが、おそらく3者の誘掖、助言によって豊閑から小倉の香月塾に入門したものは相当数にのぼったものと思われる。しかし、友庵の養子独嘯庵は、難症や慢性病に対する衆医の消極的態度に不満を覚え、父の学んだ、また父より伝えられた後世方派の医学に限界を感じていた。その結果、李朱医学深解への道を選ばず、ようやく世に出初めた古医方に魅かれ、山脇東洋に入門する。独嘯庵の抱いた鴻志は一面において、馬関で体験した様々な負の遺産に胚胎したといっても過言ではないのである。

独嘯庵が山脇、奥村両門で修業を終え、汗・吐・下の3法を得て馬関に帰ったのは、宝暦3年のことである。それから10年頃までは診療に従事するが、行状によると既に宝暦7年頃には古方を駆使した革新的診療が評判となっていたという。馬関での施療は存外長く、7、8年にも及んだ。この間に地元では古医方への信頼が深まり、これに伴い香月門人やその弟子たちの凋落も漸次始まったものと見られる。18世紀における後世方派の衰退、古方派の台頭は医学史上の定説であるが²³⁾、下関では両派の交代期を画するに際して、「独嘯庵以前・以後」という分析の視座が、極めて有効である点をここに指摘しておきたい。

おわりに

本論では筆者の発見した「即山処士藤玄雄塔」

の墓碑銘を訓釈し、若干の文献資料を交えて、江戸中期における下関医界の一斑を窺ったに過ぎぬが、当地が医史学の視座からも十分に考究に値する地域であることが、幾分なりとも理解されたのではないかと思う。

近世中期、豊関医家の遊学先の1つとして重んぜられたのは、豊前小倉の香月牛山の医仙堂であった。当時医学においては明らかに小倉藩が先進的位置にあり、修学者の受入態勢もかなり整備されていたようである。豊関の門人中からは3名の高弟が出た。それが藤江玄雄、藤井問庵、永富友庵であった。それぞれの果たした役割は異なるが、藤江と永富は赤間関の流行医となり、当地医療の向上に貢献した。また玄雄は藤左仲の、友庵は永富独嘯庵の各々義父に当たり、家児育英の功も認められる。藤井問庵は長府藩医として官務に精励、牛山師の信頼も厚く、『万里神交』の序を嘱されるほど文事にも通じていた。このように3医は、海を隔てた豊関の地において香月門発展の一翼を担ったのである。

また馬関王子町に開業して評判の高かった永富家と藤江家は、後世方派の流行医を出すとともに、次世代では古医方、漢蘭折衷派の先駆者としての独嘯庵と左仲を世に送った²⁴⁾。活躍した時代からいえば、第1世代が牛山門の3医であり、後世方派の全盛期である。第2世代が独嘯庵に当たり、下関への古方派の導入期であると同時にまた浸透期でもあった。小石門に学んだ左仲の場合、登場はやや遅く、独嘯庵とは40近い年齢差があり、むしろその男亀山（五島藩儒）に近い。従って左仲は第3世代として位置付けるべきであろう。

18世紀の下関医界の特徴としては、前期は香月門の世医が一派を形成して優勢を誇り、さらに後期に入ると永富独嘯庵の直接的影響が顕著となる点を指摘できる。この事実は馬関の地が長く続いた小倉医学の強い影響を脱したことを意味し、以後、実際に独嘯庵の直統に属する長府医学との関係がより強固に構築されることとなる。医学派の勢力交代劇は家庭内の問題であると同時に、隣接地域や諸藩間の学問的争覇の問題としても扱うべきものである。当地における両派勢力の動向や、変容の特質を的確に把握するためには、下関

のみならず、広く関門の医界を視野に入れて論ずる必要がある。その際には当然、長府藩と小倉藩の人的交流、学術交渉の状況なども十分に踏まえながら、地域横断的な分析を迫られようが、これらについては今後の課題とし、さらに資料を揃えた上で詳論したい。

注

- 1) 例えば中野操は『大坂蘭学史話』9-16（思文閣出版、京都、昭和56年）において「大坂蘭学史上の先駆者たち」の章を冒頭に設け、その最初に独嘯庵を置く。
- 2) 既発表の関連論文は、全て拙著『幕末防長儒医の研究』（知泉書館、東京、平成18年）に収録してある。関心のある方はそちらをも参照願いたい。
- 3) 拙稿「嘉永4年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に関する一考察」『山口県地方史研究』91：36-51、平成16年。後に『幕末防長儒医の研究』に収める。
- 4) 中村幸彦等編『広瀬旭荘全集』、日記編1、巻12、279-281、思文閣出版、京都、昭和57年。本文には「大隆寺山に登る（王子街の西に在り）。山頂墳墓多し。永富独嘯庵の墓前を過ぎり弔ふ。阪を陟ること二丁許、南向して阪を降り、西谷寺に出づ」（原漢文）とある。なお本論における漢文の引用は全て書き下して示した。
- 5) 同上、日記編9、後編巻50、170。
- 6) 碑文中にあるように、藤江氏は来関後に改氏しており、藤江をもって『肥後加藤侯分限帳』（青潮社、熊本、昭和60年）に該当者を検出することは賢明ではない。ちなみに同帳には藤江氏は存在しない。参考ながら、藤氏については、藤次左衛門（4人扶持）と藤与兵衛（3人扶持）の2家が確認される。御医師衆の場合は1家を除いて氏名の記載がない。その中に玄惟（8人扶持）なる人物が見えるのがやや注意されはするが、熊本時代の藤江氏が医家であったかどうかもまた定かではないのである。
- 7) 長府毛利家の「寛永15年分限帳」（下関文書館、史料叢書29、昭和62年）に藤江家は収録なく、また文政期成立の『藩中略譜』（西源四郎自筆稿本、下関市立長府図書館蔵）にも掲載がない。ところが、ここに一つ興味深い記録が存在するのである。それは寛永元年に第3回朝鮮通信使の副使として来朝した姜弘重の『東槎録』（辛基秀、仲尾宏責任編修、『大系朝鮮通信使／善隣と友好の記録』1所収、海行摺載本影印、明石書店、東京、平成8年）、11月3日の条に、「長門守の代官、西以節、藤江太郎右衛門等、又見えんことを請ふ」（203）と記されている点である。この人物あるいは藤玄雄の先祖ではなからうか。本条に従う限り、藤江氏は加藤家が改易となる9年も前から馬関にあって、長府毛利藩に土籍を有し、かつ処遇も医官ではなかったようである。西以節は元和5年、

寛永15年の両分限帳に千石取の家老として名が見えるから、こちらが使節饗応の最高責任者として長府から派遣された代官であり、在関して土地の事情に通じ、学問・教養もあった藤江氏を助役に任じて、一切の実務を弁じさせたのであろう。藤江氏の名が分限帳に見えないのは新規召抱のためと思われ、待遇は馬関の地役人に準ずる位置にあったかと推測する。その他にいま1つ注意すべきは、伊藤房次郎が『関の町誌』上(郷土物語21, 郷土史研究会, 下関, 昭和14年)に、先祖に当たる伊藤蘭舟(業種商亀屋, 明和期)の手記を「細江山根に太田と云ふ者有之由, 同町に大江を名乗者有之由, 同町藤江氏は後王子町に移る」(細江町, 222)と引用する点である。藤江氏のもと細江町に居住し、後に王子町に転居していた。蘭舟が当家の動向に注意を払っている点は、藤江氏がかかなり古くからの在地有力者であったことを物語っている。細江, 王子両町は近接しており、今日でも徒歩で10分足らずの距離にある。要するに上記の資料に拠れば、藤江氏の寛永元年時点での在関が確認されるのであり、長府藩吏としての活躍、さらにかつては細江町に住んでいたという事実も判明することになるのである。

- 8) 香月牛山については、難波恒雄編『香月牛山選集』1(漢方文献叢書3, 漢方文献刊行会, 大阪, 昭和48年)の冒頭にある難波による牛山小伝, 及び『八幡市文化財調査報告』3(同市教育委員会, 昭和33年)に取める木島甚八「牛山・香月啓益先生」が伝記としては要を得たものであり、筆者も主にこの両論を参考とした。
- 9) 富士川游等編『杏林叢書』上, 632, 思文閣, 京都, 復刻, 昭和46年。
- 10) 藤左仲の実父を三上次助とする説は、田中助一『防長医学史』下139(聚海書林, 東京, 復刻, 昭和59年), 木山芳朋『独嘯庵』19(永富独嘯庵顕彰会, 昭和32年)等に見えるものである。これらは長府図書館所蔵の永富家系図を根拠としたようである。宝暦13年の長府藩分限帳には「三上治助藤原一洗」(槍, 中扨従, 35石)がある。『藩中略譜』では次助一澄とあるのが同一人物と思われる。この人は忠一、為澄、藤七郎(早逝)の4人兄弟であったが、その母は勝原家の女ではない。また一澄には友澄と氏屋の2人の男子しかなく、室もやはり勝原の出ではない。すなわち三上次助には左仲に該当する5男は確認できないのである。ただし『藩中略譜』は不完全な部分も多く、各家譜を網羅するには至っていない。従ってそこから欠落した人物も往々あり、これが直ちに三上家と左仲の関係を否定する材料とはならない。しかも三上家では享保年間に当主忠一が藩府に困窮を訴えて御暇を願い出た結果、防長両国からの退去を命ぜられていた。ただし父氏一については、藩中子弟に対する熱心な槍術教育の功が認められ、4男の一澄に家督相続が許されたのであった。こういう厄窮があっただけに、前後の記載にも遺漏があったのかも知れぬ。一方、その長女某の存在そのものを否定する説もある。すなわち、これが吉村藤舟「永富独嘯庵」9(『郷土物語』12, 郷土史研究会, 下関, 昭和7年)に見える勝原家(独嘯庵実家)4男2女説である。吉村は三上に嫁いだとされる長女某の存在を示さず、さつ、きくをもって長女、次女と説明した。残念ながら今これを比較検討する他資料がなく、両説の当否は判定しかねる。とまれ独嘯庵の姉が三上氏に嫁したとする点については、以上のような異説も存在することを記憶に止めておきたい。
- 11) 日田郡教育会編『淡窓全集』上59(大分, 大正14年)。
- 12) 同上。
- 13) 注8: 同選集2, 585-586(昭和49年)。
- 14) 同上, 586-587。
- 15) 注10: 分限帳57. 活字本は「回庵」とあるが、長府図書館に蔵する原本は問庵となっており、誤読、または誤植と思われる。
- 16) 『藩中略譜』及び『統藩中略譜』の藤井家の条。長五郎は昌平饗修学の秀才ながら、江戸で原因不明の出奔をした。また藩儒筆頭であった璋之助の場合は、藩府の重宝窃盗、及び破獄の罪によるものである。
- 17) 注10: 木山27. 木山は昭和30年に五島の福江に自ら永富数馬を訪問した。そこで「永富家先祖法号記」(大正6年, 玄孫寅吉記)等の伝来文書の閲読の機会を得た。これはその記載に基づくものである。
- 18) 独嘯庵の著述の引用は、粟島行春『医聖永富独嘯庵』(東洋医学薬学古典研究会, 叢書日本漢方の古典3, 東京, 平成5年)に収録する影印本を用いた。また「独嘯庵先生行状」は、下関市立長府図書館蔵本に拠った。
- 19) 高弟説は吉村(注10: 15), 木山(注10: 26, 32), 粟島(注18: 18)の各書に記載がある。前掲の「永富先祖法号記」にも「友庵, 医を以て著聞す」(木山, 144)と見え、また「豊前名医香月牛山の門となり、医を業とし、特に名あり」(同, 146)とも記されている。
- 20) 山県泰恒編『周南先生文集』初編巻6. 摂陽, 堀内忠助, 渋川清衛門, 江都, 西村源六, 宝暦10年刻本。山口県立図書館蔵。
- 21) 『関の町誌』下, 222-223。
- 22) これらの事情は「独嘯庵行状」や『漫游雑記』下巻, 210-218条に照らせば容易に導かれる所である。特に「行状」に「赤間関の医生, 尽く先生を推して斯界の一人と為す」(25-29歳頃)とある点は、甚だ重要な意味を有しているよう。
- 23) 富士川游『日本医学史』342, 日新書院, 東京, 昭和16年。
- 24) その後の藤江家については、現時点では把握できていない。ただいささか気になることがある。嫡子玄隆は寛政一化政頃までは存命したであろう。さすれば孫龍は天保期には在世したものである。そこ

で『天保9年赤間関人別帳』（下関市役所，昭和34年）の王子町を含む東南部町の条に医家を徴するに，藤江氏はないものの酷似する「藤井玄碩」なる人物が確認できるのである。「エ」と「イ」の転音化は国語学上にも広く知られた現象であり，当地では「フジエ」は「フジイ」に近く発音されたと思われ，音写の際に「藤井」の表記も使用されたのだろう。これらの条件を勘案すると，あるいはこの藤井玄碩，本

論に取り上げた藤江玄雄，玄隆の子孫ではなかったか。玄碩は安政2-3年にかけて『白石正一郎日記』にその名が見え，同家の家庭医として信頼が厚かったようである。ただし藤井玄碩の墓は，玄意，玄雄の墓のある酉谷寺裏にはなく，下関市神田町の西部墓地に所在することを確認している。後妻，娘との合葬墓には，本誉蘭翁玄碩居士の法号と，文久2年12月15日の没年が刻まれている。

Medical Circles in Shimonoseki in the 18th Century and Gyuzan Katsuki's Three Pupils

Kazukuni KAMEDA

Kyushu International University, Junior and Senior High School

According to the diary of Kyokuso Hirose, there is a grave of Dokushoan Nagadomi not only in Osaka but also in Shimonoseki. Following the notes in the diary, I have been looking for his grave. However, I have not found it yet. While doing this research, I came across the tombstone of a doctor, Genyu Tou. A message of more than 300 words was inscribed on his tombstone. It tells us about the history of medicine in Shimonoseki.

Its four main points are as follows:

1. Genyu Tou was a pupil under Gyuzan Katsuki.
2. Yuan Nagadomi studied under the same teacher, and both had their own clinics in Ojicho.
3. The second son of Genyu Tou was Sachu Tou, who contributed a lot to the field of medicine as a doctor in Kyoto.
4. Monan Fujii, who wrote this message, studied at the same medical school.

This paper will first consider the message engraved on the tombstone in detail, and will introduce Genyu Tou. Secondly, it will describe the two doctors Monan Fujii and Yuan Nagadomi. Finally, this paper will consider the characteristics of medicine in Shimonoseki in the 18th century, and discuss what happened and how these doctors contributed to the new trends of medicine at that time.

Key words: Genyu Tou, Sachu Tou, Gyuzan Katsuki, Monan Fujii, Yuan Nagadomi, Dokushoan Nagadomi, medicine of Kokura and medicine of Chofu